

聖書：エペソ人への手紙 4：1～6

説教題：御霊による一致を熱心に保つ

日時：2025 年 6 月 8 日（朝拝）

先ほどの子どもにも分かりやすいお話で、使徒の働き 2 章のペンテコステの記事を取り上げました。集まっていた人々に聖霊が下り、彼らは他国の色々な言葉で神の大きなみわざについて語りました。これはしばしば創世記 11 章のバベルの出来事をひっくり返したものの、その裏返しと言われます。あのバベルの塔の出来事において人類は神に逆らうことに自分たちの力を結集させようとしてしました。神はそんな彼らをご覧になり、彼らの言葉を混乱させて彼らが互いに通じ合うことができないようにされました。それは人類へのさばきであると同時に、人類が罪において一致して速やかに滅びを招くことがないようにするための神のあわれみの行為でもありました。しかし世界はこうにバラバラに分断されたまま、もはや一致することはできなくなったのでしょうか。互いに一つとなって歩むことは不可能になったのでしょうか。そうではないことがここに示されています。使徒の働き 2 章のペンテコステにおいて、色々な国言葉が語られつつも、そこにいた彼らは一つでした。神賛美において、神礼拝において、キリストにおける神のみわざを語り合うことにおいてです。ここにこの日に下った聖霊は分裂を癒やし、一致を回復させる方であることが示されています。ともするとある人は聖霊と聞くと、聖霊による不思議な現象にばかり注目して自らもそのような体験をしたいと求めます。その結果かえって自己主張し、分裂を促進する結果となる場合があります。しかし本当に聖霊の導きによるならそうはなりません。ここでは色々な国言葉が話されつつも、神を中心として一つである共同体が生み出されることが示されました。聖霊は分裂していた世界に奇跡的な一致を与えてくださる方です。

聖霊がそのような新しい共同体を造り出してくださることは、このエペソ人への手紙でも語られています。エペソ書は全部で 6 章からなっていて、この 4 章から実践編に入ります。パウロの手紙は良く前半で教理が述べられ、後半で教理に基づく実践が勧められます。ローマ人への手紙も 1～11 章までが教理で 12～16 章が実践です。エペソ書も 1～3 章が教理篇で 4～6 章までが実践篇と言えます。その 4 章の出だしで彼は「あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい」と言います。この召しとは何でしょうか。このエペソ書のテーマ聖句は 1 章 9～10 節であると言われます。1 章 9 節後半から：「その奥義とは、キリストにあって神があらかじめお立てになった

みむねにしたがい、時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。」すなわち神はキリストにあって一致と平和の世界を取り戻されるということです。罪はすべてのものを分割し、分断し、分裂させます。これはアダムとエバの関係が墮落直後に壊れたことに端的に示されています。罪が入る前、アダムはエバを「私の骨からの骨、私の肉からの肉」と呼んで喜び迎えましたが、墮落後は「この女が！」と言って彼女を非難し、自分だけを救い出そうとしました。以後、罪はそうのように私たちの間で働いています。罪は常に自分を主張し、他の人との関係を壊し、分裂させます。こうして至るところで悲劇が起こっています。多くの人々が互いに分かり合うことができず、真の一致に生きることができないで苦しんでいます。そんな私たちを一つに集めるというご計画を神は持ってくださいっていると先のエペソ書1章にありました。2章ではユダヤ人も異邦人も一つのからだにされるということが言われています。2章18節：「このキリストを通して、私たち二つのものが、一つの御霊によって御父に近づくことができるのです。」ここに今日の箇所と同じく、私たちに一致をもたらす御霊の働きのことが述べられています。また3章6節でユダヤ人も異邦人もともに同じからだに連なると言われ、10節に「これは、今、天上にある支配と権威に、教会を通して神のきわめて豊かな知恵が知らされるためであり」と言われています。つまり神は分裂し、バラバラになり、調和が失われているこの世界をキリストにあって一つにする回復のみわざをなさっておられて、特に教会をその先駆けとしておられるということです。すべてのものを一つにする神の働きはキリストに結ばれている教会においてこそまず良く見られなければならない。そのわざは教会から始まるのです。教会を通してご自身の知恵を表そうというのが神の御心なのです。そういう召しにあずかっている者たちとして、その召しにふさわしく歩みなさいとこの4章からその実践が勧められて行くのです。

今日の箇所の中心メッセージは3節の「御霊による一致を熱心に保ちなさい」であると思います。注目すべきは「一致を作りなさい」ではなく、「一致を保ちなさい」と言われていることです。「保ちなさい」と言われているということは、その一致はすでに与えられているということを意味します。この一致は人間の力で作るものではないのです。それは聖霊によってすでに与えられているものなのです。これは私たちが体験を通して知っていることだと思います。キリストへの信仰へと導かれると私たちは突然、初めて会ったクリスチャンでも昔から一つの関係にある人のように感じます。

同じ考え、同じ性質を持っていることを知り、お互いが深い結びつきの中にあること、まさに家族のような関係にあることを感じ取ります。これはお互いが同じ聖霊を内にいただいているからです。これが御霊による一致です。

しかし私たちはこれを壊す可能性があります。自分の肉の思いによって、古い罪の性質によってです。ですからそれを保ちなさいと言われていました。そこで具体的な勧めが色々語られています。2 節から 3 節にかけて「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、平和の絆で結ばれて」とあります。今日はこれらを細かく見て行くことはできませんが、これらはすべて一致のために必要となる徳です。「謙遜」とはへりくだり。「柔和」とは優しさ。「寛容」とは「長く苦しむ」という意味で、すぐに怒らない、過剰に反応しない。「耐え忍ぶ」とはお互いの弱さを担い合うことです。そしてここにある言葉を見て分かることは、その多くがガラテヤ書 5 章で述べられている御霊の実のリストとダブっていることです。ここに出て来る言葉の内、4 つがそうです。柔和、寛容、愛、平和がそうです。原文のギリシャ語でも同じ言葉です。御霊をいただいている私たちは、このような御霊の実を結ぶ者たちとされることを祈り求めたいと思います。このような性質をもって御霊の一致を保つようにと言われていました。

このペンテコステの日、御霊が地に下りました。御霊は私たちの間に一致を生み出すお方です。この御霊による一致を「熱心に」保ちなさいと言われていました。「熱心に」という言葉は急ぐという意味の言葉です。ですからまたいつか取り組めば良いという態度で受け流すのではなく、一生懸命にこの課題に取り組む者でなければなりません。ペンテコステの聖霊を感謝し、御霊による一致を尊んで、この一致を壊す者ではないように。むしろ熱心にこれを保つ歩みへと進む者でありたいと思います。

その後にある 4～6 節には、この一致の基礎が語られています。ざっと読んで分かることは「一つ」という言葉が 7 回も出て来ることです。ですからここが一致を強調していることが分かります。もう一つの特徴は三位一体の神が述べられていることです。私たちの一致は三位一体の神の一致に基づくものであるということが言われているようです。三位一体の神が言及される順序は御霊、主キリスト、父なる神となっていて、これは私たちが経験する順番で、私たちに近い方から述べたものと考えられます。

まず4節の原文で最初に出て来るのは「からだは一つ、御霊は一つ」という言葉です。「からだ」とはキリストのからだとなる教会のことです。教会はキリストのからだとしてただ一つしかなく、その各部分は深い有機的結合で結ばれています。これは御霊が一つであることによるものです。御霊は決して個人主義を助長しません。御霊は私たちを一つのからだの関係へと導かれる方です。

その後「召しの望みが一つであったのと同じように」と続きます。召しの望みについては1章17～18節で語られていました。そこでは御霊によって心の目がはっきり見えるようになって「神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか」を知ることができますように、と祈られていました。私たちは将来同じ救いにあずかろうとしています。聖霊によってどんなに素晴らしい栄光の将来があるかを見つめる者たちとされています。なのにそんな私たちがどうしてここで喧嘩したり、仲違いをすべきでしょうか。むしろお互いは将来同じ栄光の御国でともに住み、ともに素晴らしい相続にあずかる家族であることを喜び見つめている者たちとして、そういう者たちらしい親しい交わりと睦み合いが今日の私たちの生活の特徴づけるものとなっているべきではないかということです。

5節に進んで「主はひとり、信仰は一つ、バプテスマは一つです」とあります。御霊は私たちにイエスを主と告白させる方です。その御霊に導かれて私たちが主と告白する方はお一人です。私たちは同じ方を主と告白しています。またこの方を信じる信仰も一つです。私たちは同じ信仰を共有しています。またバプテスマも一つです。これはすべてのクリスチャンが共通に持っている経験です。洗礼は私たちの一致を目に見える形で現す礼典と言えます。私たちは同じ一つの洗礼を受けています。ですから私たちの間には深い一致があるはずです。

そして6節でこの一致はさらに父なる神にまで遡ります。私たちは御霊によってキリストを知り、キリストに結ばれるだけではなく、キリストを通してさらに父なる神にまで至ります。大切な一人子キリストを私たちの救いのために、私たちを愛して遣わしてくださったのは父なる神であると知るのです。その神は「すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる」と言われています。そ

れぞれを短い言葉で言い表せば、「すべてのものの上にある」とは「超越」であり、「すべてのものを貫く」とは「遍在」であり、「すべてのもののうちにおられる」とは「内在」となります。神はこのように超越者であると同時に、遍在し、また内在している方として、ありとあらゆる仕方でこの世界で働いておられ、すべてをキリストにあって一つに集める御心（1章9～10節）を必ず成し遂げられるお方です。この神はおひとりです。ですからこの方によって生み出される交わりも一つです。

このように私たちが導き入れられている一致は三位一体の神に基づくものであり、その神がご自身を映し出すような豊かな一致をこの世界に回復させようと働きかけておられることに基づくものです。このような御心を持つ神によって救いに導かれた私たちが、どうしてその一致をあえて壊すような働きをして良いのでしょうか。それは神のみわざの反対を行くことであり、神が一生懸命造っていることを片っ端から壊すようなことです。そうではなく三位一体の神に基づく一致を保ち、それを尊び、むしろそれを促進する生活をするようにとされているのです。

私たちはキリストを信じて、ただ罪を赦され、さばきに会うことなく、天国に入れていただく者になるという意味で救われるだけではありません。神は罪によって分裂、分解しているこの世界を、ご自身を鏡で映すような一致と調和の世界へと取り戻すために働いておられます。そして特に教会はこの神のみわざの現れの先駆けとなるべきところだと言われています。この日下ったペンテコステの御霊が、この一致へと私たちを導き入れてくださっていることを感謝して、私たちはこの御霊による一致を保つことを自分の大切な使命、また課題と捉えて取り組む者でありたいと思います。御霊をいただいている者たちとして御霊の実をいよいよ結び、御霊による一致を保つためにより良く貢献する者とさせていただけますように。そして何よりも罪のためにバラバラになっているこの世界を、神がキリストにあって一つにしてくださるみわざを感謝し、またそのことを教会を通して具体的に示そうとなさっている御心を受け止めて、御霊の一致を保つ生活をもって、やがて神が完成させてくださる救いの祝福を指し示し、証しする教会の務めと栄光に歩んでまいりたいと思います。